私の現役時代

四十二期　山下英明

大学に入学するまでは、自分がボート部に入部することなど考えた事はありませんでした。そんな私が何故、試乗会に参加して入部を決めたのか、改めて考えると運命だったとしか考えられません。私が入部した時は、5 年生が 2 人、3 名生が 2 人、1 年生は自分だけでした。活動人数は実質 3 人という部としては少ない人数でしたが、先輩達がとても優しく、そして熱心にボートを教えてくれたので、寂しいと感じる事はありませんでした。初めてのレースは、理工系レガッタの新人ナックルでした。新人は自分だけで残りは先輩とOGというクルーでしたので、新人ナックルと呼んでいいかは分かりません。当たり前ですが、よい結果を残すことができ、その経験のおかげでボートを漕ぐ事が楽しくなりました。その後、先輩とダブルスカルで練習を続け、夏には相模湖レガッタに出場しました。戸田以外で漕ぐのが初めてかつ相模湖レーンの区切りが分かりにくくて戸惑いましたが、何とか力を出し切ることができました。練習時間は多くなかったですが、学業と両立させながら目標の大会に向けて頑張る楽しさを知ることができたのは、よい経験でした。ちなみにその大会で先輩の携帯電話が相模湖に沈み、携帯電話は艇に持ち込まない方がよいという教訓を得ました。また、当時は週1回程度の練習でしたが、冬に思い出作りも兼ねて、理工部屋での合宿生活を経験しました。体育連盟ボート部の方と同じ時間に起床し、一緒に同じ朝食を食べて、3 人で早朝練習の生活。朝食が「肉豆腐」と「野菜炒め」の 2 パターンだったこと、出艇する時は真っ暗で少し怖かったこと、早朝練習で疲れて埼京線で立ちながら寝ていたことは、今でもよく覚えています。何はともあれ、非常に充実した1年を過ごすことが出来ました。そして、いよいよ桜の季節がやってきました。

新人ナックル（手前から 40 期小林先輩、38 期名越先輩、42 期山下、34 期OGの清水さん）

入学式が差し迫る中、新入生に興味を持ってもらう為に、ボート部の魅力をまとめた冊子を作り、入学式で配ることにしました。先輩が主体となってやってくれたので、私がやったことは次期主将としてボート部への想いを書くことくらいでしたが、それなりに立派な冊子が完成しました。しかしながら入学式当日、不運にも天候は大雨。結果、冊子はほとんど配れず新入生は入りませんでした。部として存続が危うい状況となりましたが、4年になった先輩が卒業研究で忙しい中でも部のことをとても気にかけてくださり、練習にもよく参加をしてくれたので、活動を続けることができました。主将・主務・会計を1人でやるのは大変ではありましたが、その分、学友会・理工連盟と接点を持つことが多くなりました。そして何を血迷ったか、来年度は自分しか残らないかもしれない状況で、理工連盟の役員を担うことになりました。理工連盟の役員となると、入学式当日は理工連盟の仕事があり、新入生の勧誘を行うことが出来ません。もはや絶望的な状況でしたが、それを逆手に取り「理工ボート部は入学式に新入生の勧誘を行えないので、代わりに理工連盟からの配布書類の中に理工ボート部のチラシを入れる」という議案を通しました。結果、新入生のほぼ全員にチラシを配布でき、結果として新入部員が数名入ってくれました。

部員が少ない中で、入部してくれた後輩達には本当に感謝しております。後輩に対して、ボートの技術をうまく伝えられたわけではありません。出来た事といえば、練習後にご飯をおごってあげることくらいでした。私が1年生の時も、よく先輩がおごってくださりました。「いつもありがとうございます」と言うと、「自分たちもそうだったから」と話してくれたのをよく覚えています。先輩から受けた恩を、後輩たちに返していく、シンプルですがとても大事な教訓で、社会人になった今でもよく思い出して活用しています。余談ですが、OB になってから OB エイトで何度か大会に出場しました。実は部員が少なかったこともあり、スウィープ艇を漕ぐのは OB エイトで初めて経験しました。スウィープ艇が慣れなくて一緒に漕いだメンバーにはご迷惑をお掛けしましたが、現役時代では漕げなかったエイトを OB になって漕げたことは大変嬉しい経験でした。部員が少ない時代を経験したからこそ、一緒に頑張る仲間がいることの有り難さを改めて実感できました。

OBエイトのメンバー

最後になりますが、私の現役時代の最大の衝撃は1年生の時の「40周年記念式典」です。この小さな部に、長い歴史があり、これほどのOB・OGの方がいるとは想像しておりませんでした。OBの方から「インカレ出場するの」と質問されて戸惑ったのを覚えています。私が現役の頃はインカレに出場することは高すぎる目標でした。それが近年また出場できる部へと強化されたことは素晴らしいことだと思います。OB・OGの方との意識の違いにギャップを感じながらも、温かい言葉をたくさんかけて頂き、それがボート部を続ける原動力の1つとなりました。今の現役はコロナ禍で大変苦労していると思いますが、OB・OG会として、これからも現役の主体的な活動を支えていければと考えております。